



付 2 3 話 学科に TSS システムを構築

他学科に先駆け、TSS システムを構築し、数値計算法の講義と演習を行った話をしよう。1980 年代中頃、35 歳ごろで講師だったと思うが定かではない。当時、16 ビット PC が発売された初期の頃で、我が研究室も PC を何台か買い込み、学生を教育しながら、研究に必要な数値計算用ソフトを開発していた。突然、M 先生に予算を取るから、教育用に汎用コンピュータを買えと言われた。予算は 1 千 5 百万円程度だったと思う。導入予定のコンピュータシステムは、コンピュータオタクのエゴで、三菱製 MELCOM EX800 の中型機を選択。このマシンに決定した経緯は前回お話しした。

コンピュータ導入には、建築学科の承認が必要。教室会議で講義内容とその効果、導入予定のコンピュータシステムの説明を行った。講義は数値計算法、これまでは教養の先生が理論を教えていたが、私が来年から実際にコンピュータを使い、演習も行う。ほとんどの先生は理解したか、あるいは興味がないのか質問はなかったと記憶している。ただ、建築史の Ka 助教授がしつこく質問する。いやがらせである。

当時、技術系とデザイン系では確執があり、何かにつけてやり合っていた。子供のケンカのようなものであるが、殴り合うわけではない。技術系が何か提案すると、デメリットを並べ立てて反対する。デザイン系の昇格人事では、技術系が足を引っ張り反対、結果、年をとった助教授が多くなる。あまりに嫌味な質問、「…の意味が分からない」に対し、遂にキレて「分からないならだまっておれ」と言ってしまった。会議内はしばらく沈黙、場はしらけたが老先生がとりなし、何とか承認を得た。後で材料系の Kr 先生に呼び出され、「先輩にあの言い方はない、謝罪に行け」と叱られた。今でも良く覚えている。生意気にも自分が悪いとは思わなかったで行かなかった。今は、ひどいことを言ったと反省している。

教員数は大学設置基準によって最低数が決められている。他にも大学内の諸々の施設や設備についても指針として事細かく示されている。例えば、入学定員に対し校地面積から教室の数、蔵書数、あるいはカリキュラムや講義内容まで。人事においても同様である。旧帝大では現在でも講座制で運営され、各講座は、教授、准教授 1 名ないし 2 名、講師及び助教数名の構成である。年齢が近い准教授や講師がいると、講座を引き継ぐために強烈的なバトル、足の引っ張り合いが始まる。私立大学や講座制を敷いていない国立大学や市立大学では、主に大学科制で運営され、

入学定員に比例して学科全体で、各教員の最低人数が決まっている。無論、定員枠は大学によって異なる。

私が赴任した当時、建築学科では教員枠が 20 名であった。現在の人数 17 名と比較すると 3、4 名多い。内訳は教授 4 名、助教授 4 名、講師 5 名、助手 7 名だったと思う。組織で重要なのは個人の資質と共に年齢構成のバランスである。今思えば当時の建築学科はひどい状態で、学位取得者はたった 3 名、M 助教授と建築史の老教授、環境の教授のみであった。年齢バランスも悪く、教授が少なく講師・助手が多い。特に助教授と講師全員の年齢が近く昇格時に問題となる。このような状況に危機感を感じ、M 先生は組織改革を断行。まず、演習用助手 3 名を転職させ、学位取得可能な教員に国立大学の指導教授を紹介、研究用助手を新規に採用、結果、徐々に技術系での組織改革が進むことになる。

当時のデザイン系教員は、学位もなく査読付き論文もない。登録すれば非常勤講師は許されるが、一般には学則により他企業から給料を貰えない。にもかかわらず、彼らの多くは設計事務所を経営し、優秀な学生と共に実施設計やコンペに夢中である。今日の教育法の先をいき、体験学習・アクティブ・ラーニングであったかもしれない。技術系学科の昇格人事と同じで、論文の数が絶対であり、論文のないデザイン系教員は昇格できない。「論文に準ずる賞、例えばコンペで優秀賞を採ると論文 1 篇と見做す」これで昇格を目指す、その規準が曖昧でもめる。技術系の教員も研究を行っているが、論文にならず、業績になっていない。互いに足を引っ張り、人事も教育も停滞気味、新規の若手教員が採用できない。交代人事は、古参の教授を採用するしかなかった。

コンピュータの端末は、構造実験準備室の中二階の部屋、つまり M 先生の研究室の上階を整備して設置し、数値計算の演習を行う。少し離れた小部屋に本体と、コンソールと端末及びラインプリンタを置き、自身の研究はここで行う。カリキュラムに従って、数値計算の演習が始まる。その後、10 年近くこの科目を受け持った。技術系の講義は人気がない。選択科目となると受講者はほんの一握り、常に端末数程度で教育し易い。数値微分・積分、簡単な微分方程式の数値計算法、連立方程式の解法など講義ノートを作り、プログラミングの基礎を教育した。人に教えることは嫌いではない。教えすぎて失敗することが多い。望まれていないことや、君のためだからといった押しつけ教育は、失敗することが多い。年を取って漸く気が付いた。これらは後日お話ししよう。

非常勤講師で来ている K 先生にコンピュータを自慢した。驚きも、称賛もない。何故か、長期間、彼の教え子が徹夜で使用した。